

## あとがき

ここしばらく考えてきたことを一冊の本としてまとめることができた。各章はさまざまな媒体に発表されたものである。議論の背景は異なり、語り口にも幅があるが、どの文章も私なりの熱をこめて書いたものだ。すべてに思い入れがある。あらためて思うが、文脈を離れてしまふとどんな文章も木の葉のような軽い断片となりうる。広い海原の上をぶかぶかと浮かびながら、あちこちに流される。小さな流れが集まれば巨大な潮流を生むこともあるだろう。木の葉の集積が河川の口を詰まらせることもあるかもしれない。しかし、方向が定まらなければ威勢のいい叫びも、怨念のこもったつぶやきも、やがては無表情な落ち葉のように朽ち、はかなく消えていくだけだ。

青土社編集部の上立朋也さんがどこからともなく現れて、私の木の葉たちを魔法のように整理してくださらなければこの本は生まれなかった。そうだ、こういう建物を造りたかったのだ、と今さら自分で実感できる形にまとめてくださった。あらためて感謝申し上げたい。上立さん

のおかげで、私がずっと抱えてきた「こだわり」が透かし模様のように浮かび上がった。国語のこと、英語のこと、病のこと、事務文書のこと、うまく語れない作家たちのこと……。これを梓内におさめてシュートまで持っていくのは至難の技だった。机の上を見ていただければわかるように、私は整理整頓の習慣がない人間なのである。

これをすごく美化して言えば、短距離型ということになる。目の前の仕事は、どんな媒体からの注文でも全力疾走でこなしているつもりだ。その結果、長距離走や駅伝よりも四〇〇メートルリレーくらいの単位のみとまりができる。本書もそんな構成になったと思う。幹になる部分はあるので、木がうまく枝を広げてくれたならと願っている。

第1部冒頭の「言葉は技能なのか」にも書いたように、私は一時期、すっかり「入試制度について文句を言う人」となった。墓石にまでそう書かれそうだった。しかし、入試改革をめぐる騒乱と関係したおかげで、貴重な出会いもたくさんあった。雑誌『現代思想』（二〇一九年五月号）に『読解力が危機だ！』論が迷走するのはなぜか？』という一文を寄稿したのも、そんな出会いの一つだったと思う。

言葉が伝わらないのはなぜか。なぜ文章は読めないのか。なぜうまく語れないのか。本書の「はじめに」でも言ったように、言葉が失敗するのはあたりまえなのである。ただし、失敗の原因を考えることには意味がある。私が『現代思想』に書いた文章で言いたかったのは概略、以下のようなことだ。たしかに私たちは「この人は読めていない！」と文句を言いたくなる状

況を経験する。しかし、その原因は多岐にわたる。そもそも個人の「読解力」と言っても、着目点はさまざま。注意力、文脈把握力、知識……。読む側よりも、書く側に障害が生じていることもある。読めないことが、まさにその文章の読みどころということもある。さらには「読解力がない！」と糾弾する人自身が何かを間違っていることだってあるのだ。

何と複雑なことだろう。この文章は東京大学文学部広報委員会編『ことばの危機——大学入試改革・教育政策を問う』（集英社新書）に再録されているので、参照していただければ幸いである。

いずれにせよ、これでは失敗が常態となるのも仕方がない。読むことに限らず、言葉はいつも故障を抱え、ときには逸脱し、ときには迷走する。言葉はつねに病んでいる。

しかし、本書を読んでくださった方にはわかったかもしれないが、この失敗や迷走こそが、豊かな表現や新しい他者理解のきっかけともなってきた。文化は失敗や誤解からこそ生み出される。言葉はつねにしぶとく回復し、生き延びるのである。このことは、墓石に刻まれるくらいしつこく言い続けたいと思っている。

なお、初出時の掲載元の方々には、執筆の機会を与えてくださったことと再録のご許可をいただいたこと、深く感謝申し上げます。

二〇二一年一〇月

阿部公彦